

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アーミッシュを訪ねて 6(最終回) :
現代アメリカ社会とアーミッシュ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5811

現代アメリカ社会とアーミッシュ

鈴木七美

(すずき ななみ)



風車

北米で「アーミッシュ」を知らないという人は少ないのではない。教育問題、徴兵拒否など社会との齟齬がメディアに取り上げられ、観光対象として注目されたことも影響している。今私はモントリオールで暮らしているが、

カナダの知人から、「私もランカスターに見に行っただけど、あの黒い服装、私なら暑苦しくてとても我慢できない」などの感想も聞かれる。アーミッシュの「われわれのやり方 That's the way our kind of people do/Seller Weg dhine msers Satt Leit (ペンシルヴェニア・ダッチ)」の意味を考える人はあまり多くないのかもしれない。平和主義のアーミッシュだが、彼ら自身はこの半世紀ますます激しくな

る戦いの只中であつた。それはまさに一般社会の激動を映し出すものでもある。

● 農夫になれないアーミッシュ

合衆国では一九四〇年代後半から経済状況は安定し、ベビーブームが訪れ大量消費時代がやってきた。一九四六年から五〇年にかけて、テレビを有する世帯の数が八千から四百万近くへ急増した。まもなく州間高速自動車道が整備されて街が広がり大型ショッピングモールが次々に建設されて、人々の移動とさらなる消費を促した。一九四六年春には政府職員が公的な場で、戦後のヨーロッパ向け農産物

輸出増加のためアーミツシュも馬を使った旧式農法をやめトラックに移行すべきだと主張した。トラックを採用したアーミツシュ・グループはまもなく車も運転するようになり、オールドオーダー・アーミツシュはトラックを使わないことに強くこだわることになる。

一九六〇年頃からアーミツシュの職業は著しく変化した。ランカスターはニューヨークやフィラデルフィアなど大都市からの交通の便もよく、リゾートホテルやアウトレット・モールも整備された。地価高騰によって耕す土地を持たない人は、大工、家具職人などとして働くようになった。それはオールドオーダー・アーミツシュにとつて信念を表現する媒体を失うことでもある。神が用意した大地を耕す農夫として生きることは、家族関係、コミュニティのあり方などの理想を体現することでもあったからだ。

一時も農業から離れたくない者のなかには、ミズーリ、ミネソタ、ウイスコンシン、アイオワ、そしてカナダのオンタリオなどに移動し新しいコミュニティを築いたグループもある。一九五二年に政府は、オハイオ州パイク郡周辺に原子力のプラントを設置する意向を示し、人口は三倍に膨れ上がり土地の値段も急騰した。比較的新しかったこの

地のアーミツシュ・コミュニティの若い世代はもはや土地を購入することができず、交通量の増えた道路はバギーの通行にも支障をきたしたため、多くがカナダのオンタリオ州へ移住した。

●都会で暮らすアーミツシュ

アーミツシュの信仰は戦争参加を禁じているが、彼らの兵役拒否はしばしば問題になってきた。一九四八年に「冷戦」時の国防と西ドイツと日本への駐留のため徴兵プログラムが始められた。一九五〇年に朝鮮戦争が始まり徴兵拒否者への風あたりが強まり、五二年の夏には病院など国益に沿った民間事業に二年間従事する「1-W」という代替プログラムが提示された。1-Wを拒否する者には罰金や懲役などが課された。1-Wを務めるアーミツシュの若者たちは、コミュニティから離れて一人で暮らし若干の給料も得た。新しい環境にカルチャー・ショックを受け、孤独のなかで抑うつ状態に陥る者も続出した。都会の楽しさを満喫して二度と故郷のコミュニティに戻らない者もいた。

一九六〇年代中期には1-Wの若者の半分しかコミュニティに帰還しないことが報告され、アーミツシュも工夫を

凝らすことになる。ピーチイ・アーミッシュは、五つの州の教区内に退役者用ホームをつくり、Wの者を配置した。この活動は、「アーミッシュ・メノナイト援助組織」として発展した。オールド・オーダー・アーミッシュは、『平和の使節 *Ambassador of Peace*』の発行を開始し、一九六六年から、Wに従事している子弟の手に送り届けた。この雑誌には、Wの参加者たちの通信や教会のニュースが載せられた。一九六六年には九つの州から百以上の教会の代表者が集まって全国規模の委員会 (*National Amish Steering Committee*) を組織し、政府と交渉の末、兵役の代わりに農場でWとして労働することで合意が成立した。

● ツーリズムとアーミッシュ

一九三〇年代にはペンシルヴェニアの学校に関する論争が『タイム』や『ニューヨークタイムズ』などメディアで大きくとりあげられた。一九五〇年代には徴兵に関する問題が注目された。これらによって興味を掻き立てられた人々は、第二次世界大戦終結後のレジャー気運の高まりのなかで大都市から交通至便なランカスター郡を屈指した。

ペンシルヴェニア州通商局は「戦後のヴァケーション」に観光客を誘致するため、馬とバギーの大きな図像に「ペンシルヴェニアのブレン・ピープル」とタイトルをつけて広告を掲げた。「アーミッシュ」と明記したわけではないが、家族で出かける観光地に最適と立候補したようなものだ。一九四六年にはランカスターのホテルがアーミッシュ農場を巡るバス・ツアーを始めた。一九五〇年までに、ニューヨーク市を根拠地とするパーカー・ツアーズがランカスターに直接向かう定期便を運行した。一九五五年には、ニューヨーク市でアーミッシュをテーマにした「ブレン・ファンシー」というミュージカルも上演された。年間旅客数が百万人に達し、一九五七年には観光局も設けられた。一九六七年の『トラベル』の記事には、インディアナ州北部、次年にはオハイオ州ホームズ郡のコミュニティも紹介され、観光客に対応するビジネスも本格化した。急速な社会変化に伴って一般社会との違いが顕著になり、アーミッシュはますます注視される存在となった。

ツーリズムはアーミッシュの生活に影響を与え、より静かな環境に移る者もいたが、ほとんどは留まる道を選んだ。キルトや手工芸品を生産して収入を増やす者もいた。



ランカスターの風景

アーミッシュに関する不正確な記述を防ぐため、インタヴューに積極的に答える者も現れた。一九八四年のパラマウント映画「目撃者 Witness」に関しては、麻薬犯罪にアーミッシュが巻き込まれたという設定に対し、代理人を州議会議事堂に派遣して正式に抗議している。ツーリズムのプロレッシヤーに対しアーミッシュは他の問題への対応と同様に方策を講じ、その過程でアイデンティティを明確にしてエネルギーを蓄積したようにもみえる。実際、アーミッシュに関する情報が蓄積されるにつれ、教育や宗教に関する

権利を守ることに一般の共感を得ることも少なくなかった。

● 社会保障を拒絶する

アーミッシュ

合衆国の社会福祉は世紀転換期の進歩主義的思想にその萌芽がみられるが、大恐慌後F・ルーズベルト大統領のもとでより具体的な形を取るようになった。一

九四〇年代から五〇年代にかけて、失業者、貧民 (The Poor)、高齢者、身体に障害を持つ人々などへの保障が検討され、その後、退職者、下層階級 (lower class) も対象に含め、さらに農場必需品への助成金、大学生用ローン、空港建設、公害コントロールへのフェデラルファンドなどのプログラムが考案された。国民に「よりよい生活」を提供しようと構想されたものだが、社会的・経済的向上はアーミッシュの理想とはかけ離れていた。教会や大家族を基盤とした相互扶助によってコミュニティの生活を維持する姿勢は、公的介入とは相容れないとみなされた。

一九五五年に社会保障プログラムが自営農民にも適用されようとしたことをきっかけとして、一九五〇年代半ばからアーミッシュと政府のあいだでは、社会保障税や、メデアケア、労働災害保険などをめぐって交渉が続けられた。National Amish Steering Committee、「アーミッシュ宗教の自由全国委員会」なども関与し、アーミッシュはほぼ自分たちの相互扶助を続けることになった。

● アーミッシュの拡大

「進歩 progress」を標榜した二〇世紀アメリカ社会にあ

って、「世界から離れていること」をテーマとするアーミッシュは分派化も含めた葛藤のなかで、シンボルを創り出し信念を表明してきた。誕生から三〇〇年経た現在、彼らは急速な勢いで拡大している。ピーチイ・アーミッシュは、合衆国二三州とカナダ一州に九五の教区、ベリーズ、コスタリカ共和国、エルサルバドル共和国、パラグアイ共和国などに一七教区を拓いている。一九六六から九一年のあいだに教会員の数は一一八パーセントの増加を遂げた。

オールドオーダー・アーミッシュも統計はないものもの主としてオハイオ、ペンシルヴェニア、インディアナの教区を守り、その規模を拡大した。二〇年ごとにオールドオーダーの人口は倍加しているという歴史家もいる。子供数が多いことも一因だが、アーミッシュとして洗礼を受けることを選ぶ若者の割合が増えたことも注目される。インディアナではオールドオーダーを選択しない者の割合は、一九三〇年代生まれが二一％だったが、四〇年代生まれは一四％、五〇年代生まれは一〇％と下降傾向を示している。この間、オールドオーダー・アーミッシュの雑誌『ファミリー・ライフ』に加えて十代の若者を対象とした『ヤング・コンパニオン』も発行されるようになった。

●トータルな生の模索

アーミッシュの農場には一九世紀アメリカの風車が回る。アナクロニズムとしばしば言及されるアーミッシュだが、二〇世紀初頭には合衆国の多くが農夫であった。家族やコミュニティの関わりが強く、季節と太陽の巡りに応じて仕事をする。大地に根づいて生きようとするアーミッシュのこだわりは、かつての一般的生活を保とうとするものでもある。近代化過程で専門職化が進行し、学校、病院、各職場などはより高度の機能や効率化を図り運営されてきたが、素人が誕生や死の場面を目前にすることは稀となり、トータルな生を生きる感覚を遠いものにしてきた。アーミッシュは、近代化による「断片化(fragmentation)」をくい止め絆を繋ぎとめる装置を工夫してきたともいえよう。様々な矛盾を抱えつつオールドウヌングの変更なども検討していることに、現代に生きる意味を常に問うていることがうかがわれる。人間の生をトータルに取り戻そうという提唱(conviviality)を含め、各分野で一九七〇年代から現代の私たちのあり方が問われてきたが、アーミッシュの実践は「限界[limit]」に関する情報を豊富に提供してい

る。技術が開発され選択肢が広がり続ける今、何かを得るということはほかの何かを諦めることであるということと戦いのなかで具体的な形で示しているのだ。

多様な人々が暮らす北米では、近年多文化主義という言葉が聞かれる。主たる文化に同化させる同文化主義では望めない活力ある社会の実現を目指した語だが、そのためには基本的な制約にみなが従うという姿勢が要求される。多文化主義の有効性、個人の「権利」、民主主義などを再考する場合にも、アーミッシュをめぐる問題は参照項となろう。



ランカスターのアーミッシュの観光地

ヨーロッパから移民したアーミッシュは現在アメリカ大陸のみで生活している。ここにはユートピアとしての活力が隠されているのかもしれない。アメリカ医学社会史において注目される「植物治療運動」は、一九世紀半ばの医療専門職化に抗し、アメリカ自生の薬用植物（ロベリア）の有効性を知るふつうの人々（ordinary people）が家族や近隣の者と協力して治療にあたることを訴えたニュー・ハンプシャー州の一農夫に率いられたものである。治療は料理と同じものであり、「セルフ・ヘルプ」というアメリカの伝統を手放すまいと主張したこの運動は、フロンティアに広がりオハイオ、インディアナなどで信奉者を集めた。「幸せ well-being」とはなんなのか。何を選択しなにかを諦めるのか。後戻りできない人生を歩みつつ私たちはこれからも問い続けるのだろうか。

【参考文献】

- Ilich, Ivan, *Tools for Conviviality*, Harper & Row, Publishers, 1973
- Kraybill, D. B. and Oshman, M. A. eds, *The Amish Struggle with Modernity*, University Press of New England, 1994
- Nolt, Steven M., *A History of The Amish*, Good Books, 1992
- 鈴木七美『癒しの歴史人類学』世界思想社、二〇〇二年
- （京都文科大学／歴史人類学・医療人類学・北米文化学）